

解説

ベトナムに推進工法を絶対に普及させる

やすだ かすなり
安田 一成

ヤスタエンジニアリング(株)
専務取締役

1 はじめに

現在推進技術を取り巻く環境は、非常に悪い状況にあります。国内の社会資本整備がどんどんと進み、下水道の普及率も8割となり、新たな管きよの整備が年々縮小している中、推進工事量も年々減っていき、将来的に工事量がV字復活する見込みはありません。

また日本国といたしましても、少子高齢化、人口減少、65歳以上の人口も増え続け社会保障費も増大し、内需で経済を支えることが厳しい状況になっております。

2 現在の海外展開のきっかけや動機

このような状況の中、国内市場だけで会社の経営を持続することは非常に厳しいと判断し、2000年頃から海外に目を向け出しました。

最初に進出したのが、韓国と台湾でした。韓国と台湾はまだまだ地下インフラの整備が成熟しておらず、市場はありました。

ところが市場があるにはあるのですが、現地で推進業者が存在するため、現地企業と勝負をしなければならず、安定的に受注することが困難でした。

そこで次に目をつけたのがベトナムでした。ベトナム進出のきっかけは、たまたま日本でベトナム人と知りあい、そのベトナム人が私に「一度ベトナムにいいませんか？」と

いきました。まったくベトナムに興味がなかった私でしたが、二つ返事で「うん、いこう!」となりベトナム行きが決まりました。

そのベトナム行きが翌日に迫った夜に、ふとテレビのニュース番組を見ていると、国土交通省の前原誠司大臣(当時)がプレス発表で「ベトナムで下水道整備をやります」と発表しており、そのニュースを見て「日本がベトナムの下水道整備を行うんだ!」と思い、翌日のベトナム行きに火がつけました。

2010年6月、はじめて向かった地がベトナム最大の都市ホーチミン市でした。そのときの印象は、建設中のビルが立ちならび、道路はバイクで交通渋滞、人もあふれて活気があり、すごいエネルギーを感じました。

そこでふと考えたのが「政府はこのベトナムで下水道整備を行うといったけど、このような状況で管路の整備を



写真-1 ベトナム・ホーチミン市の道路交通状況

行うには開削では厳しい、必ず推進工法が必要になるだろう」と思い、その街並みを食い入るように眺めながら「よし!このベトナムで推進技術を広めよう」と決心しました。

3 海外展開事例

帰国後、いろんな方々にベトナムで推進工事を行うとあってまわりました。そうするとベトナムの情報が少しずつ耳に入ってきました。また新聞などを見ますとベトナムに進出している日系企業の記事など、今まで目に止まらなかったベトナムに関連する記事が目にとまり、いろんな企業がベトナムに関心を持ってると感じました。

そしていろんな方々に相談をした中のひとりが(公社)日本推進技術協会の前の専務理事であります石川和秀専務理事でした。石川専務理事が「海外展開(ベトナム)に興味があるのであれば」ということで、国土交通省と協会員とのあいだで意見交換会を開催していただきました。そのときに出席されたのが、当時の加藤裕之下水道事業調整官(現下水道事業課長)と本田康秀下水道企画課課長補佐(現埼玉県下水道局参事兼下水道事業課長)でした。

その意見交換会で私は「我々推進工法の専門業者は、日本の下水道整備の普及と同時にビジネス展開してきました。そして今では世界でトップクラスの技術を有するまでに成長しました。しかし下水道普及率が上がるにつれて工事が縮小していく中、このまま国内だけの市場で会社を継続させるのは難しい。なので海外進出が必要だ。だが我々推進業界は中小企業なので、海外進出をするのにリスクが多い。そこで国からもっとバックアップをしてくれませんか?」と訴えました。加藤事業調整官と本田課長補佐は真剣に我々の訴えに耳を傾けてくれました。

2010年12月、国土交通省がベトナム建設省とのあいだで「下水道整備に関する技術協力」と題して覚書を交わすことになりました。

その調印式が行われると決まったときに本田課長補佐から「安田さん、調印式に参加されますか!?’と声をかけていただき、私は二つ返事で「はい!是非参加さ

せていただきます」と答えました。そこで私は「国土交通省がベトナム建設省と覚書を交わすのか!これは絶対にビジネスチャンスがあるぞ!」と思い、さらにベトナムに対しての思いに火がつけました。

そして調印式当日、大勢の方が出席しており、日本側とベトナム側とで、下水道整備に関する技術的なセミナーを行い、その調印式にご一緒していた(公社)日本推進技術協会の中野正明会長が推進工法の説明を簡単に行いました。そのときは時間がなく3分という短さの説明でしたが、私の目に映ったのは、その短い説明だったにもかかわらず、ベトナムの方が非常に興味を持った姿でした。

そこで私は、あまりにもベトナムの方の人数が多いので、自分の席の隣のベトナム人だけと名刺交換し「後日連絡をするのでまた会いましょう」といって調印式の会場をあとにしました。

調印式が行われた翌月、名刺交換をしたベトナム人と会う約束をし、その人の事務所に訪問することになりました。そのベトナム人はハイ氏といい、ベトナム建設省から違う団体へ移られたとのことでした。

そのハイ氏の部署は、都市計画を担っている団体らしく、都市計画専門誌を発行しているということで「この推進工法の特集を組んで雑誌に掲載しよう」という話になりました。

私としては、あまりよく理解していませんでしたが、流れて「まあいいか」という感じで雑誌の掲載をお願いすることになりました。そしてハイ氏が「今、上司がいるので紹介するよ!」ということで紹介していただきました。そ



写真-2 日本の推進技術を集めたベトナムの都市計画専門誌「DO TH! (VIETNAM URBAN JOURNAL)」